

カムチベット語小中甸・吹亞頂 [Choswateng] 方言の文法スケッチ

鈴木 博之

キーワード：カムチベット語、rGyalthang 下位方言群、名詞句、動詞句

[要旨] 本稿では、中国雲南省香格里拉県小中甸郷吹亞頂行政村で話されるカムチベット語吹亞頂 [Choswateng] 方言 (Sems-kyi-nyila 方言群 rGyalthang 下位方言群) について、名詞句と動詞句および文のタイプの簡便な記述を行う。特に格体系と動詞句を構成する接辞を詳しく取り上げて記述する。

1 はじめに

中国雲南省迪慶藏族自治州香格里拉県を中心に話されるカムチベット語 Sems-kyi-nyila (香格里拉) 方言群 rGyalthang (建塘) 下位方言群に属する各種方言¹は、瞿靄堂・金效静 (1981) や張濟川 (1993) などの先行研究がカムチベット語の中の独立方言とみなす「迪慶方言」を代表する方言群であるといえる。この方言群を代表する rGyalthang 方言は、陸紹尊 (1990, 1992)、Hongladarom (1996, 2000, 2007ab)、Wang (1996)、《中甸県誌》(1997:147-153)、《雲南省誌》(1998:421-441)、王曉松 (2008)、趙金燦・李玉朋 (2014) などの先行研究が記述を行っている²。

rGyalthang 下位方言群に属する諸方言は音声方面において多様な異なりをもつ方言群であるが、その多くは同下位方言群内部による歴史的音変化によって説明がつく点が多く、歴史的な差異が共時的に現れていると言える (Suzuki 2013)。この中で、本稿で記述する香格里拉県小中甸郷和平行政村吹亞頂 [Chos-ba-steng] 自然村 (「區哇迪」と書かれることもある) で話される Choswateng 方言は最も古態的な音特徴を保持している方言である (Suzuki 2013、鈴木 2014)。小中甸郷は自然村ごとに音声特徴において方言差が認められる。吹亞頂自然村の周辺に分布する集落で酷似する方言が話されているかどうかはまだ調査できていない。

吹亞頂村に居住するチベット語母語話者の普段の言語使用は、ほぼ土地のチベット語方言を用いて行われ、必要に応じて漢語 (西南官話雲南方言) の使用も見られる。大部分の村民はこれら二言語を併用する。このため、Choswateng 方言の使用環境は、rGyalthang 下位方言群に属する方言群の中では良好な部類に入ると考えられる。呉光范 (2009:295³) によれば、吹亞頂村の人口は 171 人で、この数を Choswateng 方言の話者数と見積もることができる。

¹ 方言区分に関する最新の見解は鈴木 (2014) を参照。rGyalthang 下位方言群に属する方言は、現段階では香格里拉県建塘 [rGyal-thang] 鎮、小中甸 [Yang-thang] 郷、格咱 [sKad-grags] 郷、三壩郷および洛吉郷に分布する。

² 長らく rGyalthang 方言の記述に携わってきた Krisadawan Hongladarom 氏は、2005 年当時同方言の記述文法を用意しているということであった (同氏との個人談話) が、未だ出版されていない。

³ 2005 年末のデータに基づく。

本稿で用いる Choswateng 方言の言語資料は、筆者の現地調査で得られたものである。主な調査協力者はロゾン・ラモ [bLo-bzang Lha-mo] さん（女性）で、吹亞頂村の出身である。語彙調査および文法調査ともに漢語を媒介言語とした翻訳形式を中心に行った。筆者は諸般の事情で調査をほぼ吹亞頂村以外で行ってきたが、一度だけ調査協力者の実家を訪れたことがあり、民話の収集および言語使用に関する情報収集を行うことができた。

本稿の構成は、Choswateng 方言の音体系の概要（2 節）に始まり、名詞句（3 節）、動詞句（4 節）、文のタイプと分類（5 節）の順で記述を行う。内容は Choswateng 方言の記述に的を絞り、近縁方言やチベット文語形式との対比という観点からの分析は行わない⁴。語釈つき例文には通し番号を与える。末尾に索引を兼ねたもくじを配する。

筆者はかつて 2 種のカムチベット語方言に関する文法スケッチを提出した（鈴木 2011, 2012）。これらは形態・統語について品詞別の記述を目指したものであったが、結果として動詞の記述は動詞句の記述に相当するものとなった。そのため今回は句構造の記述という枠組みの中で品詞別の概要の記述を含める形で Choswateng 方言の素描を行う。また、澤田 (2013) や Tshe-ring Lha-mo (2013) の記述も参考にし、文のタイプの記述にも意を用いた。そのため、先の 2 種とは趣を異にするものであるが、同方言の輪郭を示すという目的は達成できると考える。なお、本スケッチは、名詞句・動詞句といった分類方法から漏れる周辺的な要素の記述が不十分であるほか、なお詳細な分析を必要とする部分が少なくない。これについては、個別に稿を改め行うことにする。

2 Choswateng 方言の音体系

表記には音標文字を用い、IPA のほか朱曉農 (2010) に定義される音標文字と鈴木 (2005) で用いられている表記法も断りなく用いる。なお、音体系と音声分析の詳細は鈴木 (2014) を参照。

2.1 音節構造

Choswateng 方言の最大の音節構造（分節音の配列）は、鈴木 (2005) を参照して以下のよう
に記述できる。

$${}^cC_iGVCC \quad \text{および} \quad CC_iGVCC$$

このうち C_i （初頭子音）と V （音節核の母音）が必須であり、 C_iV を音節の最小構成とみなすことができる。

初頭子音連続において、 cC_i と CC_i が区別されるのは、第 1 要素が鼻音の時に限られる。

Choswateng 方言に認められる末子音には、単子音に /ʔ, j/、複子音に /jʔ/ がある。このうち、/ʔ/ が大部分の例を占める。

これに超分節音素として声調が加わって実現される。ただし声調は原則的に語単位でかかるが、接辞類が付加される場合には必ずしも語単位ではなく形態素単位になる（2.2 参照）。

⁴ Choswateng 方言における主要なチベット文語形式との対応関係は鈴木 (2014) が記述している。

2.2 超分節音素

Choswateng 方言の超分節音素はピッチの高低による声調として実現される。声調パターンとして、以下の4種が認められる。

ˉ : 高平 ˊ : 上昇 ˋ : 下降 ˆ : 上昇下降

声調は原則として語単位でかかるが、最大で2音節を単位とし、3音節以降は低平～中平のピッチで発音され、弁別的でない。

声調のかかる単位の中には各種接尾辞類（格標識、名詞化標識、動詞接尾辞など）も含まれるが、接頭辞がある場合は接頭辞の声調パターンが語全体の声調に影響し、必ずしも中核的な語の声調が維持されるとは限らず、動詞複合形式では中心となる各形態素（動詞語幹や TAM 標識）に接頭辞がつくたびに声調が新たに設定される。特定の接頭辞は独立した声調を担うこともある。

以上の声調記号は語（または音節）の初頭に付される。

2.3 母音

舌位置による一覧は次のようになる。

ɿ-ʅ	i	ɯ	u
	e	ə	o
	ɛ		ɔ
	a		ɑ

母音には長短および鼻母音/非鼻母音が弁別的である。母音の長短と鼻母音/非鼻母音は互いに独立しているため、計4種の対立が認められる。ただし、全ての舌位置について4種の対立が認められるわけではない。特に長鼻母音は出現に制限が見られ、語例もきわめて限定的である。

母音の舌位置の表記は、実際の発音に最も近い補助記号を用いない音標文字で行う。母音の性質上、音環境によって舌位置に変動が認められるが、本稿ではその記述を省略する。

摩擦性母音/ɿ-ʅ/はそれぞれ先行子音によって相補分布し、1音素である。ただし両者の調音方法に明確な異なりがあるため、書き分ける⁵。相補分布の条件は次のとおり。[ɿ]はそり舌音に後続し、[ʅ]はそれ以外の子音に後続する。また、この音素の音声実現はしばしば強い咽頭化を伴う。長母音として現れる例がほとんどである。

「短母音+声門閉鎖音/?/」の組み合わせは、語（形態素）によって語中において長母音と交替することがある。この場合は実際の発音に基づいて記述する。

⁵ この措置は Choswateng 方言に関連する言語としては王曉松 (2008) の rGyalthang 方言の記述に適用されているほか、漢語北京方言（または普通話）の記述でも一般的に行われており、朱曉農 (2010:307, 310) でも踏襲されている。

2.4 子音

音節構造の主子音 (C_i) 位置に現れる要素の一覧は以下のようである。

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋		軟口蓋	声門
				前		後		
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h	t ^h	c ^h		k ^h	
	無声無気	p	t	t̚	c		k	ʔ
	有声	b	d	d̚	ɟ		g	
破擦音	無声有気		ts ^h	t͡s ^h	t͡ɕ ^h			
	無声無気		ts	t͡s	t͡ɕ			
	有声		dz	d͡z	d͡ʒ			
摩擦音	無声有気		s ^h	ʃ ^h	ç ^h	ç ^h	x ^h	
	無声無気		s	ʃ	ç	ç	x	h
	有声		z	ʒ	ʒ	ʒ	ɣ	ɦ
鼻音	有声	m	n	ɳ	ɳ	ŋ	ŋ	
	無声	m̥	n̥		ɳ̥	ŋ̥	ŋ̥	
流音	有声		l	r				
	無声		l̥	r̥				
半母音	有声	w			j			

硬口蓋閉鎖音系列/c^h, c, ɟ/は舌背全体が広く硬口蓋に密着するタイプの調音動作で実現するのではなく、硬口蓋中部から後部にかけてのより狭い範囲で閉鎖を形成する。ただし前部軟口蓋音 ([k̟] など) で現れることは、音声学的に存在するとしても、まれである。

また、Choswateng 方言に見られる子音連続の組み合わせ数は比較的多いが、その組み合わせのパターンは単純で、前鼻音、前気音、わたり音を含むものに分けられる。前の2者とわたり音は独立して現れることができるから、最大で3子音連続を形成するが、その出現頻度は低い。

3 名詞句

3.1 名詞句の基本構造

Choswateng 方言における名詞句は、中心となる語が名詞の場合、おおよそ以下のような構造で現れる。

(指示詞)-(関係節)-名詞-(形容詞)-(指示詞/数詞)-格標識-(主題標識)

名詞句は基本的に何らかの格標識 (ゼロ形態含む) を伴うと分析できる。しかし実際の記述の上では、一部の場所・時間などを表す名詞句がゼロ形態による格標識をとるものは絶対格ではなく位格におかれていると考え、ゼロ形態素 (∅) および語釈をいちいち表示しない。

また、格標識には主題標識が後続しうる。主題標識は名詞句のみに付加される。

指示詞は2か所に現れうるが、同時に現れることはまれである。詳細は 3.3.2 参照。

修飾句は名詞化接辞を伴う名詞句の場合は被修飾語である名詞に前置され、形容詞もしくはそれに準じる形態の場合は被修飾語である名詞に後置される。両者の修飾句は共起可能である。

また、名詞化接辞を伴う名詞句それ自体が名詞と同等に機能するときも以上の名詞句構造をとる。

以上のうち、名詞句の中心となる名詞に先行する指示詞、関係節、形容詞は、音節数に関わらず独自に声調を担うことができる。

名詞句の中心となる語には、名詞のほかに代名詞も現れる。代名詞の場合、名詞句はおおよそ以下のような構造で現れる。

代名詞-(数詞)-格標識-(主題標識)

代名詞は、形態によっては、格標示を格標識ではなく語幹の形態変化によって表すものがある。なお、代名詞は修飾語(句)を伴わない。

3.2 名詞

単音節語、2音節語が多い。派生語や複合語の場合、3音節や4音節で1語になっているものもある。

1. 単音節語

^hnɔ̄「空」、^hsa「土」、^hgwə「頭」、^hpʰaʔ「ぶた」

2. 2音節語

^hda wa「月(天体)」、^htʂʰu niʔ「泉」、^hpu s^ha「息子」、^hɕə ljə「梨」

3. 3音節語

^hlǎ mbwə tʂʰə「象」、^hɕh̄: ka ljəʔ「蝶」、^hnɔ̄ ha ^htʰaʔ「シャツ」

4. 4音節語

^hlɔ̄ fia ʂʰɛj pɔ̄「柳」、^hŋu ja: k^hɔ̄ bu「みかん」、^hʔa wə ŋe tswə「鸚鵡」

3、4音節語と考えられるものの中には、1～2音節ごとに個別の声調を担うものもある。たとえば^hsɛ ^hzu s^ha「キッチン」、^hna lo ^htʰa: s^ha「イヤリング」などがある。

語構成について見ると、次のような接尾辞がよく見られる：/pa, ba, ma, wa, pwə, bwə, mwə/。いずれも語彙的に決まっており、基本的に生産的であるとは言えない。/ma/には「雌性」を表す場合には、各種動物名に付加されて「めすの～」を表す。特徴的なのは/wa/で、本来語・外来語を問わず各種地名に付加されて「～(出身)の人」の意味を表す、数少ない生産的な接辞である。

3.3 代名詞

人称代名詞、指示詞、疑問詞類に分けて述べる。

3.3.1 人称代名詞

人称代名詞は、人称と数が区別される。

人称	単数	複数	双数
1	ʼŋa	ʼʔa wo kē ʼʔa na kē [排除]	ʼʔa wo nəj ʼʔa na nəj [排除]
2	ʼtɕʰuʔ	ʼtɕʰuʔ ŋa: kē	ʼtɕʰuʔ ŋa: nəj
3	ʼkʰwə	ʼkʰo ŋa: kē	ʼkʰo ŋa: nəj

「性」は区別されない。「双数」は「複数」の形式に数詞「2」を付加して表すことができ、それ以外の数も現れうるため、体系としては数詞によって数が明示される複数と、そうでない複数の対立を認めることができる。「敬称」は認められない。1人称複数および双数には「包括」「排除」の区別がある。双数形は、以上に示した形式に/ka/が後続する場合がある。文意が明快であれば、各複数形の最後の音節は脱落することが可能である。

各人称の単数は、格標識を伴うと代名詞語幹の形態が変化するほか、場合によっては形態変化のみで表し、次のようになる。

格	1人称単数	2人称単数	3人称単数
絶対格	ʼŋa	ʼtɕʰuʔ	ʼkʰwə
属格	ʼŋi:	ʼtɕʰiʔ	ʼkʰu:
能格	ʼŋɛ:	ʼtɕʰuʔ	ʼkʰə: / ʼkʰəi:-jə
格標識を伴うとき	ʼŋi-	ʼtɕʰuʔ-	ʼkʰo- / ʼkʰu-

格標識を伴うときの人称代名詞の形態は、以上に示した形式のほか、絶対格でもよい。

以上のほか、「～の家の/～の家族の」という表現が見られる。形態としては/ʼʔaⁿdzi/「私(たち)の家の」、/ʼtɕʰuⁿdzi/「あなた(がた)の家の」、/ʼkʰoⁿdzi/「彼(ら)の家の」となる。形態上は全体で1つの代名詞とみなすことができるが、通常は修飾用法として用いられ、名詞化接辞もとることができる。ほかに/ʼʔa na/「我々一家」という形式が認められる。

- (1) ʼʔa na kē-φ ʼtɕʰə jə ʼtɕʰuʔ-φ ʼma-ⁿthō-reʔ
 1.[複/排]-[絶] なぜ あなた-[絶] [否]-見える-[判]
 私たちにはどうしてあなたが見えないのでしょうか？

3.3.2 指示代名詞

指示詞は近称、遠称、超遠称の区別があり、事物(人も含む)と場所の異なる系列がある。

	近称	遠称	超遠称
事物	ʼ ⁿ djə / ʼ ⁿ djə / ʼʔə ndjə	ʼwo tje / ʼtjə	ʼʔa tje
場所	ʼnde za / ʼ ⁿ di je / ʼ ⁿ di duʔ	ʼfio tje / ʼfio duʔ / ʼte duʔ	ʼʔa tje za / ʼ ^h u duʔ

3人称代名詞と同形の/ʼkʰwə/も既知の人・事物に関する指示代名詞「それ」として機能する。複数の事物を示す形式に、/ʼʔa ŋi^hə/「これら」、/ʼʔa tə^hə/「あれら」がある。

様態の指示詞には、/ʼfio ŋiⁿda/「このような」、/ʼfio təⁿda/「あのような」がある。

指示詞は代名詞の機能と形容詞の機能を兼ねる部分がある。指示形容詞として用いる場合、/ʼⁿdjə/「この」と/ʼtjə, ʼtje/「あの」が修飾対象の名詞に前置される。指示形容詞は独立の声調を持つ。これらが単なる指示形容詞として、ただしその指示力がほぼ失われた状態として用

いられるとき、名詞に後置され、かつ独立した声調を担わない。

- (2) ʔaⁿdjə ʔ^huʔ-φ-tə ʔaⁿdzi-tə ʔreʔ
 この ぶた-[絶]-[主] 1.[属]-[名] [判]
 このぶたは我々一家のです。
- (3) ʔa na-φ ʔ^hu duʔ ʔⁿdoʔ
 我々一家 あそこ [存]
 我々一家はあそこに住んでいます。
- (4) ʔe wa-ndjə-φ ʔ^htjeʔ-s^ha ʔka: ze ʔreʔ
 もの-[指]-[絶] 与える-[名] どこ [判]
 このものを渡す場所はどこですか？

3.3.3 疑問詞類 (形容詞・副詞も含む)

ʔ^hu 「誰」、ʔ^hu ŋa: kē 「誰々」

- (5) ʔ^huʔ-φ ʔ^hu-φ ʔjī
 2-[絶] 誰-[絶] [判]
 あなたは誰ですか？

ʔ^hə⁶ 「何」、ʔkə djɯ / ʔkə lɯ 「何」

- (6) ʔ^huʔ ŋa: kē-φ ʔ^hə-φ ʔje-ⁿdoʔ
 2.[複]-[絶] 何-[絶] する-[進]
 あなたたちは何をしていますのですか？

ʔka le 「どの」

- (7) ʔa wo kē-φ ʔka le ʔlɔ-φ ʔⁿgwə
 1.[複]-[絶] どの 道-[位] 行く
 我々はどの道を行きましようか？

ʔka: ze 「どこ」

- (8) ʔe wa-ndjə-φ ʔ^htjeʔ-s^ha ʔka: ze ʔreʔ
 もの-[指]-[絶] 与える-[名] どこ [判]
 このものを渡す場所はどこですか？

ʔka: jə 「どこで」

- (9) ʔ^huʔ-φ ʔka: jə ʔⁿu-wa
 2-[絶] どこで 買う-[過]
 あなたはどこで買いましたか？

ʔka: 「どこへ」

- (10) ʔ^hwə-φ ʔka: ʔpa-ⁿgwə-reʔ
 3-[絶] どこへ [方]-行く-[判]
 彼はどこへ行ってしまいましたか？

⁶ [ʔ^hə] という発音も認められる。

˘ka: le 「どこから」

- (11) ˘kʰwə-φ ˘ka: le ˘fio-ŋgwə-re?
 3-[絶] どこから [方]-行く-[判]
 彼はどこから来ましたか？

˘ka: wa 「どこの人」

- (12) ˘kʰwə-φ ˘ka: wa ˘re?
 3-[絶] どこの人 [判]
 彼はどこの人ですか？

˘kə zē 「いつ」

- (13) ˘tʰuʔ-φ ˘ka zē ˘pʰə-ŋu
 2. 単-[絶] いつ [方]-泣く
 あなたはいつまで泣いているのですか？

˘kə zoʔ 「どう (する)、どのような方法で」

- (14) ˘sʰa-φ ˘ka zoʔ ˘ŋa-ŋgo-re?
 肉-[絶] どう 切る-[未]-[判]
 肉はどのように切りますか？

˘kə zeʔ 「どれぐらい、いくら」

- (15) ˘n dʒə ˘pə sʰa-φ ˘ŋ dʒi ˘kō ˘kə zeʔ ˘re?
 この 牛肉-[絶] 500g 1 いくら [判]
 この牛肉は 500g いくらですか？

˘tʰə jə⁷ 「なぜ」

- (16) ˘kʰwə-φ ˘tʰə jə ˘ma-fiō-reʔ ˘n dwoʔ
 3-[属] なぜ [否]-来る-[判]
 彼はどうして来ないのですか？

なお、次のような文では疑問詞が含まれていても疑問を表さない。

- (17) ˘sʰu-φ ˘ze jī nə ˘ŋgwə ˘ma-ʰpuʔ
 誰-[絶] としても 行く [否]-あえてする
 誰であっても行く勇気はありません。

- (18) ˘ŋa-φ ˘tʰə-φ-la ˘ŋeʔ
 1-[絶] 何-[絶]-も [存/否]
 私は何も持っていません。

次の文は文脈により解釈が2通りある。

⁷ ˘tʰə jə という形式は、そもそも ˘tʰə jə (何-[具]) であったと考えられる。

- (19) ʔtɕʰuʔ-φ ʔtɕʰə-φ ʰiɡu:
 2-[絶] 何-[絶] 必要である
 a. あなたは何が必要ですか？
 b. あなたは何かを必要としています。

3.4 名詞化標識

頻繁に見出される名詞化標識には/nə/、/tə/、/zə/、/sʰa/がある。/nə/は基本的に「人、行為者、道具」を表し、/tə/は「行為」を表し、/zə/は「事物」を表し、/sʰa/は「事物」を表すほかに「場所」を表す用法もある⁸。形容詞の名詞化は/tə/に限定される。

名詞化前	名詞化後
ʔtsʰõ ʰi dzoʔ 「商売する」	ʔtsʰõ ʰi dzoʔ-nə 「商人」
ʰi jõ 「歌う」	ʰi jõ-tə 「歌うこと」
ʰi tɕʰa 「食べる」	ʰi tɕʰa-zə 「食べ物」
ʰi tɕʰɔ 「飲む」	ʰi tɕʰɔ-sʰa 「食べ物」
ʰi sɛ ʰi zu 「ごはんを作る」	ʰi sɛ ʰi zu-sʰa 「キッチン」
ʰi kuw ʰi kuw: 「白い」	ʰi kuw ʰi kuw:-tə 「白いもの」

以上のうち、事物を指すものとして用いられる/zə/と/sʰa/の異なりは、前者が名詞化される語が表す動作をこれから行うものを特に示し、後者はより抽象的な意味で用いられる。また、/tə/は行為を表明することから、「歌う」の動詞語幹に付加されても「歌」という意味で用いられない。実際の使用においては行為の主体を含む形式で用いられることが多い。

- (20) ʰi ɲa-φ ʰi kʰə: ʰi jõ-tə-φ ʰi ɲɛ-ʰi dõ
 1-[絶] 3.[能] 歌う-[名]-[絶] 聞く-愛する
 私が彼が歌うのを聞くのが好きです。

/nə/は主に「人、行為者、道具」を表す名詞句を形成する場合に用いられる(21, 22)。

- (21) ʰi pʰej dzə-φ ʰi tɕʰuʔ-nə-φ ʔtɕʰuʔ-φ ʰi ʔa-zɛ
 コップ-[絶] 壊す-[名]-[絶] 2-[絶] [疑]-[判]
 コップを壊したのはあなたですか？

- (22) ʰi ʔa lju-φ-de ʰi ɕwa-φ ʰi zõ-nə-φ ʰi reʔ
 猫-[絶]-[主] ねずみ-[絶] 捕まえる-[名]-[絶] [判]
 猫というのはねずみを捕まえるもの[動物]です。

名詞化した名詞句は修飾句になれるが、例文を見る限り必ず被修飾語(句)に前置される。以上に挙げた名詞化標識のうち、修飾句としても用いられるものに/tə/と/nə/がある。

- (23) ʰi kʰə: ʰi zwə-tʰi-tə ʰi tɕʰaj-φ ʰi ma-zõ
 3.[能] 作る-[達]-[名] おかず-[絶] [否]-おいしい
 彼が作ったおかずはおいしくありません。

⁸ 名詞化接辞のうち、/tə/と/sʰa/は、音環境によってそれぞれ [də] と [za] という発音になることがある。

- (24) ʼpe: gʷ:-φ ʼkwē-nə ʼçi:-φ ʼka: ʼpa-ŋgʷə-reʔ
 チベット服-[絶] 着る-[名] 子供-[絶] どこへ [方]-行く-[判]
 チベット服を着た子はどこへ行ってしまいましたか？

以上に述べた以外に/jaʔ/という名詞化接辞があり、「不確定の出来事」を表す (15)。

- (25) ʼŋa-φ ʼtɕʰaʔ-φ ʼŋuɯj-φ ʼhɪlō ʼdʒe:-jaʔ-φ ʼhʉʔ-ʰsō
 1-[絶] 2-[絶] お金-[絶] もってくる 忘れる-[名]-[絶] 驚く-思う
 私はあなたがお金をもってくるのを忘れていたのではないかと危惧しています。

「忘れる」などの特定の動詞については動詞句を名詞化接辞を必要とせず動詞連続のような構造をとる。

/sʰa/は、「場所」の意味で後続の名詞句を修飾するとき、さらに属格標識が後続する (16)。

- (26) ʼfio tje-tə ʼkʰo ŋa: kē-φ ʼla mwə-φ ʼtʰō-sʰa-jə ʼsʰa [sʰa-φ ʼjī
 ここ-[主] 3.[複]-[絶] [人名]-[絶] 見かける-[名]-[属] 場所-[絶] [判]
 ここは彼らがラモを見かけた場所です。

なお、補文標識は名詞化標識とは異なるか、または必要とされない。

動詞句に名詞化標識を付加する慣用的表現に次のようなものがある。

- (27) ʼŋa-φ ʼfīō-tə ʼhʉiʔ ʼhʉtse la ʼsō mwə ʼnō-ɕō
 1-[絶] 来る-[名] 1 とても おいしい においがする-[受]
 私は (部屋に) 入るなりとてもよい香りがしました。(いい気持ちです)
 この場合、名詞化標識を伴う名詞句に格標示は行わない。

3.5 格体系

Choswateng 方言は、文法格として他動詞の行為者をマークする能格型の格体系を持つ。

3.5.1 格標識一覧表

Choswateng 方言における格標識の一覧は次のとおりである。

形式	S/A/P 標示	非 S/A/P 標示
無標 (φ)	絶対格	(位格)
jə	能格	
ji / jə		属格
hɛ		具格
tsə / wə / tə		与格
nə / wa		位格
tsʰə / tɕi		奪格
peʔ		比較格

Choswateng 方言は、文法格として絶対格と能格のみが機能する。

以上のうち、能格/属格はそれぞれ形態的に同一のものとして実現されうる。ただし属格は [ji] と発音されることが多い。これらは格の機能、そして格標識の脱落の可否において異なるため、

分離して扱う。

一方、絶対格は無標であり、例文中に ϕ で示す。また位格もしばしば音形が省略され、絶対格と区別ができなくなるが、文中での役割が異なっている。以下の例文において、音形式の認められない位格は一律表示しない⁹。格標識の連続は認められない。属格標識は、それに名詞化接辞/ta/が後続することができ、「～のもの」を意味する¹⁰。また、/tə/は主題標識として用いられることもあり、この場合格標識とは共起しないようである。すなわち、主題標識は絶対格もしくは位格につく。

このほか、与格にも /-tə/ という形式があり、単なる方向ではなく受益者を表す場合によく用いられ、しばしば [də] と発音される。

なお、人称代名詞は特定の格について形態変化によって標示する。詳細は 3.3.1 を参照。また、人称代名詞にのみ現れる格標識があり、共格 /-kə di/ 「～と一緒に」などがある。

3.5.2 用法

以下、文法格 (S/A/P 標示)、非文法格 (非 S/A/P 標示) の順に、簡潔に用法を記述する。

文法格：絶対格

絶対格の用法としては、判断動詞の主語および補語、存在動詞の主語および所有者、自動詞の主語、他動詞の目的語 (被動者)、他動詞の主語 (行為者)、使役文における被使役者などがある。

判断動詞の主語および補語

- (28) ʔk^hwə- ϕ ʔs^hu- ϕ ʔreʔ
 3-[絶] 誰-[絶] [判]
 彼は誰ですか？

存在動詞の主語および補語

- (29) ʔtɕ^huʔ- ϕ ʔ^hzo-tə ʔtɕ^hõ- ϕ ʔka: ʔjuʔ
 2-[絶] 作る-[名] 家-[絶] どこ [存]
 あなたが建てた家はどこにあるのですか？

自動詞、形容詞述語の主語

- (30) ʔʔa tje ʔ^hěj p^hũ- ϕ ʔ^hkõ-də ʔ^hə-nə
 あの 木-[絶] 乾燥する-[接続] 死ぬ-[現認]
 あの木は枯れて死んでいます。

他動詞の被動者

⁹ 時間 (/ʔa rēj/ 「今日」、/nõ ɕeʔ/ 「夜」など)・空間 (/ʔ^hgõ/ 「上」、/ʔsoʔ/ 「下」など) を表す語は、品詞としては名詞の一種と考えられるが、格標識を伴わない形式は通常意味上は位格として用いられると考え、絶対格の標示を行わない。

¹⁰ 文の構造上、この種の属格は絶対格におかれていると分析できるかもしれないが、本稿では絶対格の記述を行わない。

- (31) ʔⁿdjə ʔji jə-φ ʔkə zoʔ ʔⁿdɛj
 この 文字-[絶] どう 読む
 この文字はどのように読みますか？

他動詞の行為者

- (32) ʔti: ʔŋa-φ ʔtɕ^huʔ-φ ʔtjə-φ ʔ^htɛ-zə
 後ほど 1-[絶] 2-[絶] あれ-[絶] 見せる-[未]
 後ほど私はあなたにそれを見せましょう。

受益者

- (33) ʔk^hə: ʔŋa-φ ʔ^htje:-ɕɔ̃
 3.[能] 1-[絶] 与える-[受]
 彼は私に（何かを）くれました。

使役文における被使役者¹¹

- (34) ʔ^hu-jə ʔtɕ^huʔ-φ ʔsa-jĩ
 誰-[能] 2-[絶] 食べる-[判]
 誰があなたに食べさせましたか？

文意が明確であれば、すべての文法格の表示が行われる名詞句は絶対格で現れうる。

- (35) ʔk^hwə-φ ʔtɕ^huʔ-φ ʔta li ʔwāʔ
 3-[絶] 2-[絶] 大理 派遣する
 彼はあなたを大理に派遣します。

文法格：能格

能格は他動詞の主語（行為者）を示すが、代名詞である場合を除き、その使用は任意であり、行為者を強調したり対比したい場合に特に用いられる。ただし行為者が被動者より後に来る場合¹²は、ほぼ義務的に用いられる。

行為者が文頭にある場合

- (36) ʔtɕ^huʔ ʔ^ɰgu le: ʔmjɛ-φ ʔ^htɕ^ha-nə
 2.[能] さっき 薬-[絶] 食べる-[現認]
 あなたはさっき薬を飲みました。

行為者が被動者より後に来る場合¹³

- (37) ʔca-φ-tə ʔk^hə: ʔsa-t^hũ
 鶏-[絶]-[主] 3.[能] 殺す-[完]
 鶏は彼に殺されました。

被動者が表示されない場合

¹¹ 使役文における動詞が自動詞でも他動詞でも、被使役者は絶対格で標示される。また、(34)のように、使役を表す形態素がつかなくても、文脈が特定されている場合は使役文として解釈される。(34)が「誰があなたを食べましたか？」と解釈されることはないのである。

¹² この語順の場合、日本語では受け身で訳すほうが意味的に近いと考えられる。

¹³ この場合、文頭にくる名詞句には主題標識がつくことが通例である。

- (38) ʔkʰə: ʔŋa-φ ʰtje:-çõ
3.[能] 1-[絶] 与える-[受]

彼は私に（何かを）くれました。

原因を表す場合（無生物の行為者としての解釈）

- (39) ʔçʰu:-jə ʔna:-φ ʰni:-tʰñ-nə
雹-[具] 裸麦-[絶] 枯れる-[完]-[現認]

雹で裸麦が枯れてしまっています。

名詞句の中に現れる行為者を示すときにも能格標示が維持される。

- (40) ʔtçʰuʔ ʔŋa-jə ʔruʔ-tə ʰšʰej-ziʔ-φ ʔkʰə:
2.[能] 私-[能] する-[名] 薪-1-[絶] 持って入る

あなたは私が割った薪を持って入りなさい。

使役文の使役者も能格で現れる。

- (41) ʰshu-jə ʔtçʰuʔ-φ ʔsa-jĩ
誰-[能] 2-[絶] 食べる-[判]

誰があなたに食べさせましたか？

能格が期待される場合に絶対格を用いるのも文法的で許容される。

- (42) ʔwo tje-φ ʔŋa-φ ʔtʰʂʰa ʔnə-ʂʰe:
あれ-[絶] 1-[絶] 食べる [否]-知っている

あれは私は食べることができません。

- (43) ʔʔa wo kē-φ ʔkʰwə-φ ʔtʰʂʰa ʔma-tʂʰuʔ-kə
1.[複/包]-[絶] 3-[絶] 食べる [否]-よろしい-[気]

私たちは彼に食べさせてはいけません。

非文法格：属格

属格は所属、属性を表す際に用いられる。属格標識は/ji, jə/である。人称代名詞の場合、形態変化のみで属格を表す。

- (44) ʔni: ʔruʔ
1.[属] 友人

私の友人

- (45) ʔtçʰuʔ-φ ʔnə-jə ʔçe ra-φ ʔma-ruʔ
2-[絶] 人-[属] もの-[絶] [否]-動かす

あなたは人のものを動かしてはいけません。

代名詞、人名および人間を表す普通名詞には^hdzi/がついて意味的には属格として用いられ、「～の家の、～のところの」の意味をもつ。

- (46) ʔtçʰu^hdzi ʔpu mwə
2.[属] 娘

あなたの家の娘

属格に名詞化接辞/tə/がつくことで、「～のもの」という名詞句として用いることができる。

- (47) ˈn dʒə ˈh sɪː caː-φ ˈs h u-ji-tə ˈre?
 この 金のコップ-[絶] 誰-[属]-[名] [判]
 この金のコップは誰のものですか？

なお、/tə/という音形には多数の意味が存在し、次の例のように1文中に共起することもある。

- (48) ˈn dʒə ˈj ə j ə-φ-tə ˈt e h i?-tə-φ ˈʔ a-re? ˈt ə ˈt e h i?-tə-φ
 この 本-[絶]-[主] 2.[属]-[名]-[絶] [疑]-[判] または 3.[属]-[名]-[絶]
 ˈʔ a-re?
 [疑]-[判]
 この本はあなたのですか、それとも彼のですか？

非文法格：具格

具格は道具、材質、手段などを示す際に用いられる。

材質

- (49) ˈt j ə ˈh ɡ ɔ̃-φ-tə ˈh i d o h d z ə-j ə ˈh t s u ʔ-h ē ˈh i d ɔ̃-re?
 あの 箱-[絶]-[主] [人名]-[能] 鉄-[具] 打つ-[判]
 あの箱は、ドジュが鉄で打って作りました。

道具

- (50) ˈt j ə ˈt s h ə-φ-tə ˈl a m w ə-j ə ˈs h ē j h j e-h ē ˈh i d ɔ̃
 あの 犬-[絶]-[主] [人名]-[能] 棍棒-[具] 打つ
 あの犬はラモが棍棒で打ちました。

非文法格：与格

与格は受益者・受領者および行為の向かう先を示す際に用いられる。各標識の形態としては、/tsə/がよく使われるが、ほかにも/wə/や/ta/などが認められる。これらの間の詳しい差異は不明であるが、/ta/が受益者を表すときによく現れ、/tsə/は中立的な行為の向かう先を表す場合に用いられるように見える。これらの与格標識は文脈が明瞭であれば省略されることがしばしばある。

受益者・受領者

- (51) ˈŋ a-φ ˈt e h u ʔ-t s ə ˈk h ɔ̃ m w ə ˈh t e i?-φ ˈh i c h u
 1-[絶] 2-[与] 桃 1-[絶] 洗う
 私はあなたのために桃1個を洗います。
- (52) ˈt e h u ʔ-φ ˈm b e d u ʔ-w ə ˈt s h u-φ ˈt s ə k ə ˈh t ə?
 2-[絶] 花-[与] 水-[絶] 少し 撒く
 あなたは花に少し水をやりなさい。
- (53) ˈk h əː ˈw ə ˈk h o-t ə ˈj ə j ə h t e i?-φ ˈh t j e?-t h i
 3.[能] また 3-[与] 本 1-[絶] 与える-[完]
 彼女はまた彼に本1冊をあげました。

行為の向かう先

- (54) `tɕʰɰʔ-φ `sʰɰ-tɕə ʔə-zə
 2-[絶] 誰-[与] 尋ねる-[未]
 あなたは誰に尋ねるつもりですか？

次のような場合、与格の有無は意味するところが異なる。

- (55) a `tɕʰɰʔ-φ `kʰo-tɕə ʔa kɰ ʰmbeʔ
 2-[絶] 3-[与] おじさん 呼ぶ
 あなたは彼に向かって「おじさん」と呼びなさい。
- b `tɕʰɰʔ-φ ʔkʰwə-φ ʔa kɰ ʰmbeʔ
 2-[絶] 3-[絶] おじさん 呼ぶ
 あなたは彼のことを（「おじいさん」ではなく）「おじさん」と呼びなさい。

非文法格：位格

位格は無標の位置・方向を示す。文意が明快な場合は省略可能で、しばしば絶対格として現れる。

- (56) ʔrə-nə ʔʰō: tse la-φ ʰmō-reʔ
 山-[位] きのご類-[絶] 多い-[判]
 山にはきのご類が多いです。
- (57) ʔkʰə: ʔʰēj pʰū ʰta-zɪʔ-φ ʔri: ʔrəʔ-tʰi
 3.[能] 木 馬-1-[絶] くくりつける-[完]
 彼は木に馬をくくりつけました。

また、「～にとって」という表現で用いられる。

- (58) ʔŋa-nə ʔtɕɰ xwa-φ ʰmi mje-fia ʰsō-ɕō
 1-[位] 菊の花-[絶] 小さい-[気] 思う-[受]
 私には菊の花が小さいと思われます。

/ʰtɕ/「上」、/ʔŋɛ/「前」など空間・時間を表す語には意味的には位格におかれていると考えられるが位格標識がつかない。また、これらに先行する名詞句は格標識を必要としないが、絶対格におかれているともいえないため、格が標示されないと分析する。ただし両者は互いに独立した声調を担うため、空間・時間を表す語は格標識への文法化の度合いが高いともいえない。

- (59) ʔɕə lɕə ʰŋa ʰnō ni ʔkʰə: ʰsō-φ ʰtɕʰa-tʰi
 梨 5-[絶] 内 3.[能] 3-[絶] 食べる-[完]
 5個の梨の中で、彼は3個食べました。
- (60) ʔlwə ʰsō ʔŋɛ ʔŋa-φ ʰgwə-nō
 年 3 前 1-[絶] 行く-[経]
 3年前私は行ったことがあります。

非文法格：奪格

奪格は時間・空間の起点を表す。奪格標識には2つの形態が認められるが、使い分けの基準ははっきりしない。

- (61) ʰl̥ɔ̃-φ-tə ʰte duʔ-tshə ʰfiō-nə
 風-[絶]-[主] あちら-[奪] 来る-[現認]
 風はあちらから来ています。

- (62) ʰde ʰge-t̥ei ʰla sʰa ʰnɛ: pə la ʰdz̥ɔ̃ tʰaʔ-φ ʰka zɛ ʰjuʔ
 [地名]-[奪] [地名] 間 距離-[絶] どれぐらい [存]
 デルゲからラサまでの間にどれぐらいの距離がありますか？

非文法格：比較格

比較格は比較対象を表し、起点を示す場所格の一種と考えられる。

- (63) ʰdjə ʰmbe duʔ-φ ʰtje ʰmbe duʔ-peʔ ʰdzi:-nə
 この 花-[絶] あの 花-[比] 美しい-[現認]
 この花はあの花よりきれいです。

- (64) ʰt̥h̥uʔ-φ ʰŋa-peʔ ʰdz̥u:-tshə ji ʰdzuʔ
 2-[絶] 1-[比] 走る-[?] 速い
 あなたは私より走るのが速いです。

以上のように、比較される程度を表す語（たいていは形容詞）は文末に置かれる。

3.6 数詞・量詞

3.6.1 基数詞

以下に1から29までの形態を示す。

	+10	+20
0	ʰt̥su	ʰnə ʰsu
1	ʰt̥ciʔ	ʰnə ʰsu ʰtsa: ʰt̥ciʔ
2	ʰnəj	ʰnə ʰsu ʰtsa: nəj
3	ʰsō	ʰnə ʰsu ʰtsa: sō
4	ʰzə	ʰnə ʰsu ʰtsa: zə
5	ʰŋa	ʰnə ʰsu ʰtsa: ŋa
6	ʰt̥ɔʔ	ʰnə ʰsu ʰtsa: t̥ɔʔ
7	ʰd̥ē	ʰnə ʰsu ʰtsa: d̥ē
8	ʰd̥zeʔ	ʰnə ʰsu ʰtsa: d̥zeʔ
9	ʰgu	ʰnə ʰsu ʰtsa: gu

20 台の数は「20 + つなぎの要素^htsai/¹⁴ + 1 の位」で表し、「30」以降のきりの悪い数字も20 台と同様の構成をとる。

30 から 100 までのきりのよい数は以下のようになる。

ˊs^hõ t̚sɯ 「30」

ˊzə^h t̚sɯ 「40」

ˊŋa^h t̚sɯ 「50」

ˊtɕ: t̚sɯ 「60」

ˊ^hdẽ t̚sɯ 「70」

ˊ^hdze: t̚sɯ 「80」

ˊ^hgɯ^h t̚sɯ 「90」

ˊ^hdza 「100」

「100」から「199」までは「100 + 各種 2 けたの数」を並列して構成する。

「1000」以上の数は以下のようなものがある。

ˊ^htõ t̚^ha? 「1000」

ˊ^htə t̚^ha? 「10000」

ˊ^mbu t̚^ha? 「100000」

3.6.2 序数詞

序数詞は基本的に基数詞に /-ʔä/ を先行させることによって形成されるが、「第 1」は /-ʔä ˊtā mwə/ となる点に注意が必要である。

3.6.3 量詞

量詞は大きく類別詞と計量の単位 (度量衡の単位を含む) に分けられるが、前者は Choswateng 方言には認められず、名詞 (句) に直接数詞を後続させることができる。また、度量衡の単位は漢語をそのまま用いることが多い。

量詞を含む語順は「名詞 + 量詞 + 数詞」である。何らかの容器による単位を表す場合、「1」に /kõ/ が用いられる。また、「1」の場合は声調を担わず、先行名詞 (もしくは量詞) とともに 1 つの声調を形成する。^htei?/ は [tei?] と発音されることがある。

(65) ˊnə {^htei? / ˊnəj}

人 {1/2}

1 人の人 / 2 人の人

(66) ˊl̥õ ˊt̚^ha^h t̚^hei?

靴 対 1

1 そろいの靴

¹⁴ 後続の 1 の位が「6」の場合に形式が異なる。声調は後続の 1 の位とともに 1 つの声調範囲を形成し、下降調となる。

- (67) ʔa raʔ ʔca: kō
 酒 瓶 1
 1 瓶の酒

3.7 形容詞：修飾用法として

Choswateng 方言における形容詞は、名詞に後続させて修飾語として用いられる場合と、動詞と共通する接辞をとって述語になる場合がある。ここでは、名詞を修飾する構造について述べる。

修飾用法として用いられる形容詞の形態としては、以下のようなものが代表的である。

1. 1 音節語幹
 ʔ^hdzō 「緑色の」、ʔnu: 「間違った」、ʔkō 「ひまな」
2. 重複語幹およびそれに準じるもの
 ʔmi mje 「小さい」、ʔ^hso^hsoʔ 「薄い」、ʔnaʔ naʔ 「黒い」
3. 1 音節語幹+接尾辞
 ʔrēj bwə 「長い」、ʔ^htō ba 「空の」、ʔ^hci: ɕ^ha 「明るい」
4. 2 音節語
 ʔⁿdaⁿde 「大きい」、ʔ^hkō rī 「高い」、ʔⁿdzō rēj 「遠い」

重複タイプは、必ずしも第1音節と第2音節の音形式が同じになるとは限らない。また、重複それ自体は形態の一特徴であり、形容詞の修飾用法および単純な述語用法¹⁵であることを明示する以外に特別な意味機能があるわけではない。

文中で修飾語として用いられる場合、形容詞は被修飾名詞に後置されるのを基本とし、数詞は形容詞に後続する。形容詞が複数ある場合、数量を表す形容詞が最後にくる。

- (68) ʔja-φ ʔmbe duʔ ʔ^hmo^hmo: ʔ^hdze pa-φ ʔjuʔ
 1-[絶] 花 赤い 多くの-[絶] [存]
 私は多くの赤い花を持っています。

3.8 主題標識

主題標識は/tə/¹⁶で、語用論的に特定の名詞句を主題化したいときに格標識の後ろに現れ、同時に名詞句の終止を示す。また、息継ぎや考えながら発話するときのフィラーとして機能する場合があり、必ずしも付加された名詞句を主題化しているとは限らない。

- (69) ʔa lju-φ-tə ʔɕwa-φ ʔ^hzō-nə
 猫-[絶]-[主] ねずみ-[絶] 捕まえる-[現認] 注¹⁷
 猫とはねずみを捕まえるものです。

¹⁵ 特定の述語用法の場合には重複しない例がある。4.3 参照。

¹⁶ 音声学的には [tə, də, te, de, t̃ə, d̃ə] など、さまざまな音声実現が認められる。

¹⁷ TAM 接辞の/nə/は後ろに他の TAM 接辞をとらないため、この発話は/^hzō/「捕まえる」が述語になる。もし/ɾeʔ/などの判断動詞が後続する場合、この/nə/は名詞化接辞として機能し、構造が異なる。

次のような例では、語用論的な観点から必ず主題標識が用いられる。

- (70) ^ˈɕwa-φ-tə ʔa lju-φ ^hcaʔ-mē
 ねずみ-[絶]-[主] 猫-[絶] 恐れる-[否/判]
 ねずみが猫を恐れません。

4 動詞句

4.1 動詞句の基本構造

Choswateng 方言における動詞句は、動詞語幹が単独すなわち動詞連続を形成していない場合、おおよそ以下のような構造で現れる。

(方向接辞)-(否定辞/疑問接辞)-動詞語幹-(TAM 標示部分)-(疑問接辞/語気助辞)

このうち、TAM 標示部分は複数の接辞群から成立しており、否定辞がここに現れる場合もある。そのとき否定辞は動詞語幹に先行しえない。

4.2 動詞の種類

動詞は述語動詞と本動詞に分けることができる。

4.2.1 述語動詞

述語動詞には、判断動詞と存在動詞がある。これらは単独用法のほかに動詞句末接辞として置かれて動詞句を形成する要素にもなる。これらには後述の TAM 接辞はつかない。

判断動詞および存在動詞の一部には、語幹そのものに肯定と否定の2種がある。以下に一覧表を掲げる。

	肯定	否定
判断動詞	ʔi	ʔmē
	ʔreʔ	ʔma-reʔ
	ʔzē	
	-ʔā / ʔā mboʔ	
存在動詞	ʔjuʔ	ʔneʔ
	ʔnō	ʔnə-nō / ʔma-nō
	ʔndoʔ	ʔnə-ndoʔ / ʔma-ndoʔ

判断動詞の /ʔi/ と /ʔreʔ/ の使い分けは、前者が発話内容に話者自らを関連づける (egophoric) ときに用いられ、そうでない (non-egophoric) 場合は後者が用いられる。 /ʔzē/ は事実関係の断定 (定義) を意味する場合によく用いられる。特別な否定形は認められない。 /-ʔā, ʔā mboʔ/ の詳しい用法は不明である。なお、 /-ʔā/ が単独で用いられる例は認められない。

- (71) ^ˈŋa-φ ^ˈpeʔ-φ {ʔi/ʔzē}
 1-[絶] チベット人-[絶] {[判]/[判]}
 私はチベット人です。

- (72) ʼŋa-φ ʼlo sɿ-φ ʼmē
 1-[絶] 先生-[絶] [否/判]
 私は先生ではありません。
- (73) ʼkʰwə-φ ʼpʰɑʔ-φ ʼreʔ
 3-[絶] ぶた-[絶] [判]
 それはぶたです。
- (74) ʼʰlo ʰzō də ʰtciʔ ʼla mwə ʼnəj ka-φ ʼçwo sē-φ ʼʔā mboʔ
 [人名] と [人名] 2人-[絶] 学生-[絶] [判]
 ロゾンとラモの2人は学生です。

過去の事柄について判断を表す場合、/ʼreʔ/が用いられる傾向にある。

- (75) ʼkʰwə-φ ʼŋē-tə ʼlo sɿ-φ ʼreʔ
 1-[絶] 以前-[主] 先生-[絶] [判]
 彼は以前先生でした。

推測を述べる場合には、判断動詞に後続する要素が存在するのを前提に、/ʼjī/が用いられる。

- (76) ʼtjə ʼʔa lju-φ-də ʼkʰo ʰdzi-tə ʼʔa-jī-ʰze-ŋō
 あの 猫-[絶]-[主] 3.[属]-[主] [疑]-[判]-[推]-[判]
 あの猫は彼らの家のでしょう。

不確定な事柄についての話者の判断や話者個人の感想を述べる場合、判断動詞は/ʼzē-jī/が選択され、なおかつ TAM 標識の中の述語動詞/-jī/を伴うことができる。

- (77) ʼkʰwə-φ ʼlo sɿ-φ ʼzē-jī
 3-[絶] 先生-[絶] [判]-[判]
 彼は先生でしょう。

存在動詞については、/ʼjuʔ/は主に所有および話者のよく知っている事物の存在を表し、/ʼnō/は見ている非人物の存在を表し、/ʼnoʔ/は人物の存在を表すのが基本的な用法といえる。ただし、後2者の使い分けは話者によって判断基準が異なり、話者の管理下にある有生物（家畜なども含む）に/ʼnoʔ/を用いる話者もいる。/ʼjuʔ, ʼnoʔ/には判断動詞が後続できる。

- (78) ʼŋa-φ ʼʔa daʔ ʼji jə ʼmbū ʰtciʔ-φ ʼjuʔ
 1-[絶] 宗教経典 巻 1-[絶] [存]
 私は1巻の宗教経典を持っています。
- (79) ʼŋa-φ ʼpej tci ʼnoʔ
 1-[絶] [地名] [存]
 私は北京にいます。
- (80) ʼkʰwə-nə ʼtsʰə-φ ʼnoʔ-reʔ
 3-[位] 犬-[絶] [存]-[判]
 彼のところには犬がいるのです。

- (81) ʔtɕʰõ ʔjɛ: ma-tə ʔdzõ mba ʰtɕiʔ-φ ʔnõ
 家 前-[主] 橋 1-[絶] [存]

家の前には1本の橋があります。

次のように、話者がその存在をよく知っているが見えない場合は/juʔ/が選択される。

- (82) ʔwo tʰã-φ-tə ʔdzõ ʔkʰa: {ʔjuʔ/*ʔnõ}
 学校-[絶]-[主] 町のはずれ [存]

学校は町のはずれにあります。

判断動詞以外の TAM 接辞は存在動詞にはつかないため、文脈によって存在している状態の時期が決定される。

- (83) ʔti ni: ʔtɕʰuʔ-φ ʔka: ʔdoʔ
 あの日 2-[絶] どこに [存]

あの日あなたはどこにいましたか？

存在動詞の否定は/juʔ/が否定語幹/ʔɛʔ/をもつ。ʔnõ/および/ʔdoʔ/の否定は、3つある否定辞(4.4.2 参照)を本来の差異にしたがって用いることが可能である。

- (84) ʔtɕʰa-zə-φ ʔtɕʰə-ziʔ-φ ʔɛʔ
 食べる-[名]-[絶] 何-1-[絶] [否/存]

食べるものは何一つありません。

- (85) ʔʔa ni: ʔtɕʰõ ʔnĩ-φ ʔma-nõ
 祖父 家 古い-[絶] [否]-[存]

祖父の古い家はなくなっています。

- (86) a ʔlõ-φ ʔɛʔ
 道 [否/存]
 道は(そもそも)ありません。

- b ʔlõ-φ ʔnə-nõ
 道 [否]-[存]
 道は(以前はありましたが今はなくなって)ありません。

なお、本動詞/ʔdeʔ/「いる、住んでいる」も意味的に有生物の存在表現として用いられる¹⁸。

- (87) ʔtɕʰõ ʔnõ ni ʔdɕu: mə-φ ʔdeʔ-nə
 家 内 客-[絶] いる-[現認]

家の中にはお客がいます。

- (88) ʔni: ʔpu sʰa: φ ʔma-ʔdeʔ-nõ
 1.[属] 息子-[絶] [否]-いる-[判]

私の息子がいなくなりました。

¹⁸ /ʔdeʔ/「いる」を本動詞とするのは、たとえば 4.5.1 で扱う TAM 接辞のうち、判断動詞以外が付加できることによる。

4.2.2 本動詞

動詞の形態としては、次のようなものが代表的である。

1. 1音節語幹

^htʰɔ̃「飲む」、^hmwə「耕す」

2. 語幹（音節数を問わない）＋補助動詞（/^hdzoʔ/や/^hjeʔ/）「する」

ʔnə^hda^hdzoʔ「銃撃する」、^hdə^hdō^hjeʔ「衝突する」

/^hdzoʔ/に先行する部分には漢語の動詞がそのまま挿入されることがある。

本動詞の語幹自体は無変化であるが、命令形と非命令形で語幹が異なる動詞がある。

語義	非命令形	命令形
行く	^h gwə	^h ō
来る	^h ō	^h uʔ

また、動詞の要求する項の数とその格標示の観点から、次のような分類が可能である。

1. 自動詞（主語は絶対格）

^hgwə「行く」、^hju「泣く」

2. 他動詞（行為者は能格か絶対格、被動者は絶対格）

ʔnə^h「買う」、^hci^h「書く」

本動詞のみで完結する文は、ほとんどの場合「命令」「勧誘」などの意味を表す。

- (89) ^htʰɔ̃-φ ^hrō rō ^htʰɛ
2-[絶] 自分自身で 考える
あなたは自分自身で考えなさい。

- (90) ^hci^h-φ ^hma^hdō
子供-[絶] [否]-叩く
子供を叩くな。

4.3 形容詞：述語用法として

ここでは、動詞と共通する接辞をとって述語になる場合の形容詞について述べる。

形容詞の形態は修飾用法の場合と変わらない。ただし、接辞類が付加されるとき、重複するタイプの語幹は非重複形となり、/pwə, mwə/などの接尾辞が脱落するのが通例である。また、本動詞と同様に何も付加されずに名詞句として用いられるが、格標識を付加する場合は名詞化接辞/tə/が必要とされる。

- (91) ^hdzi^h-tə-φ ^hdzi^h-nə
美しい-[名]-[絶] 美しい-[現認]
美しいことには美しいです。

形容詞述語が比較級を表す場合、接辞類が付加されてもされなくても、重複するタイプの語

幹は非重複形となり、/pwə, mwə/などの接尾辞が脱落するのが通例である。

- (92) ʔkʰwə-φ ʔŋa-peʔ ʔlwə ʰsō ʔtʂʰə
 3-[絶] 1-[比] 年 3 大きい
 彼は私より3歳年上です。

- (93) ʔmjē-φ ʰtʂʰa-tə-peʔ ʔkʰɔʔ ʰdzɔʔ ʔjaʔ-reʔ
 薬-[絶] 食べる-[名]-[比] 点滴を打つ よい-[判]
 薬を飲むよりも点滴を打つほうがよいです。

形容詞述語が最上級を表す場合、比較級の形式に接尾辞/wa/がつき、かつ直前に/ʔkē/が置かれる。接尾辞/wa/の後ろに TAM 接辞も付加されうる。

- (94) ʔkʰwə-φ-tə ʔkʰo ʰdzi ʔpā ʰnō ni ʔkē ʰtʰo wa-nə
 3-[絶]-[主] 3-[属] クラス 内 最も高い-[現認]
 彼は彼らのクラスの中で最も背が高いです。

- (95) ʰŋɛ-çō ʔna ʔkē ʔtʂʰə wa-φ ʰŋɛ
 買う-[受] ならば 最も大きい-[絶] 買う
 買うのならば、最も大きいものを買いなさい。

形容詞述語はたいてい主語の状態を表すが、構文によっては発話外に意味上の主語をとることがある。

- (96) ʔtʂʰɪʔ-φ ʔçʰā-nə ʔa-ʰdzi-nə
 2-[絶] 心-[位] [疑]-美しい-[現認]
 あなたは心の中で(それを)美しいと感じますか？

4.4 接頭辞類

4.4.1 方向接辞

方向接辞と考えられる要素には、次の5種類がある¹⁹。

1. 上方：ʔja-
2. 下方：ʔwə-
3. 向心：ʔtsʰə-
4. 離心：ʔpʰa-
5. 中立：ʔpə-

中立以外の接辞は、通常移動動詞に付加され、移動の方向を示す。向心・離心の基準点は、通常発話者に置かれる。中立の接辞は、動作の完了を強調したり、命令の意味をもつ。また、特定の動詞と結びついて直接方向とは関係のない慣用的な表現もあるが、その場合は方向接辞と共通の要素は独立した声調を担う場合があり、ふるまいが異なる。

¹⁹ 「中立」の方向接辞は以下に解説するように、純粹に方向を示すものではないが、接辞それ自体のふるまいや他の方向接辞とも共起しない点を考慮し、方向接辞と同列に扱うことにする。

- (97) ʼshõ nə ʼtʃʰu tsʰuʔ ʰtʃu ʼwə-ŋgwə-zə
 明日 時間 10 [方]-行く-[未]
 (私は) 明日 10 時に下の/下手のほうに行きます。
- (98) ʼtʃʰuʔ-φ ʰtsʰə-fiõ
 2-[絶] [方]-来る
 あなたはこちらに向かって来ます。(帰ってきます)
- (99) ʼŋe: ʼjə ʔə-φ ʼkʰo-tə ʰpə-ʰtjeʔ
 1.[能] 本-[絶] 3-[絶] [方]-与える
 私は本を彼にあげました。

4.4.2 否定辞

否定辞には、以下の3種がある。

1. 未来否定：ʼŋə-
2. 非未来²⁰ 否定：ʼma-
3. 状態否定：ʼku:-

未来否定と非未来否定の異なりは次のようである。

- (100) a ʼŋa-φ ʰha ʼŋə-gwə
 1-[絶] [否]-わかる-[判]
 私はわかりません。(1つもわかるところに達していない) 注²¹
- b ʼŋa-φ ʰha ʼma-gwə
 1-[絶] [否]-わかる-[判]
 私はわかっています。(少しはわかったところがある)

否定辞は、それが動詞句のどこに配されようとも、必ず声調を担う。

- (101) ʼŋa-φ ʰʃẽj-nə ʰgwə-ʼŋə-gu:
 1-[絶] 畑-[位] 行く-[否]-[必要]
 私は畑へ行かなくてもよいです。

非未来否定は禁止命令²²にも用いられる。

- (102) ʼçi:-φ ʼma-ʰdõ
 子供-[絶] [否]-叩く
 子供を叩くな。

状態否定は述語動詞や形容詞の否定に用いられる。

²⁰ 非未来とは行為がすでに起こっている「現在」および「過去」の事柄をさす。また、[ʼmə]と発音されることもある。

²¹ (100)の動詞/ʰha ʼkwə/「わかる」のような形態素分析のできない複音節からなる動詞は、その接辞類を最終音節に付加するが、語釈の上では接頭辞が初頭にくる。

²² 禁止命令の/ʼma-/は常に[ʼma]と発音される。非未来否定か禁止命令かは文脈によって決まる。

- (103) ʔ^hwə-φ-tə ʔ^hõ mba-φ ʔka:-zẽ
 3-[絶]-[主] 商人-[絶] [否]-[判]
 彼は商人ではありません。
- (104) ʔə ndjə-φ-tə ʔ^htʂ^ha ʔka:-nẽ
 これ-[絶]-[主] 食べる [否]-してよい
 これは食べられません。

4.4.3 疑間接辞

疑間接辞は疑問文を形成するときに用いられるほか、推量や推測を述べるときにも現れる。

疑問文を形成する接辞は接頭辞と接尾辞がある。ただし両者は共起しない。

ここでは接頭辞について述べる。疑間接頭辞には/ʔa-/が認められる。疑間接頭辞は動詞語幹に否定辞がつかない場合に限って現れる。動詞が TAM 接辞を伴う場合、疑間接頭辞は動詞語幹ではなく TAM 接辞の直前にも現れうる。

- (105) ʔⁿdjə ʔjə jə-φ-tə ʔtʂ^hiʔ-tə-φ ʔa-reʔ
 この 本-[絶]-[主] 2.[属]-[名]-[絶] [疑]-[判]
 この本はあなたのですか？

選択疑問文の場合は疑間接頭辞がついた述語動詞に由来するであろうʔa reʔが用いられる。

- (106) ʔtʂ^huʔ-φ ʔmi ɕjẽ-φ ʔ^htʂ^ha-zə ʔa reʔ ʔə sɿ-φ
 2-[絶] ビーフン-[絶] 食べる-[未] [選択疑問] もち米麵-[絶]
 ʔ^htʂ^ha-zə
 食べる-[未]
 あなたはビーフンを食べますか、それとももち米麵を食べますか？

疑間接頭辞ʔa-と同一形態であるが、疑問を表さず自問を表す事例も認められる。

- (107) ʔⁿdjə ʔ^ha-φ-tə ʔ^hta-^hde: nə tə ʔⁿdzi:-nə de
 この 肉-[絶]-[主] 見る-[進] あと 美しい-[現認] て
 ʔa-zõ-tʂ^hə
 [疑]-おいしい-[否/推]
 この肉は見ていると美しいですが、おいしいかな？

推量や推測を述べる場合、ʔa-が動詞語幹もしくは特定の接尾辞に先行し、かつ動詞句末に述語動詞を伴う形式で表す事例がある。

- (108) ʔ^hwə-φ ʔa-ⁿgwə-^hze:-zẽ
 3-[絶] [疑]-行く-[推]-[判]
 彼はたぶん行きます。

4.5 接尾辞類

4.5.1 TAM を表す接辞群

動詞語幹の後部には TAM を表す接辞がつく。この接辞は動詞句に付加され、限られた例で複数の要素が共起することもある。それに加えて、話者の発話に対する態度 (M) を表現する述

語動詞が後続しうる。配列をモデル化すると、次のようになる。

(TA 接辞-1)-(TA 接辞-2)-(AM 接辞)-(述語動詞)

一番うしろに語気を表す助辞もしくは諾否疑問用の疑問接辞が付加されうる。また、可能性・推測を表す表現を構成する要素も述語動詞に後続しうる。

それぞれに入る接辞類の形態の一覧は次のようである。

1. TA 接辞-1

-zə, -tʃə, -^hdzə, -tɕi

2. TA 接辞-2

-gɯ, -^hdeɪ, -ɕ^hoʔ, -t^hũ, -t^hi, -ts^hɿ, -wa, -ɕõ, -ɲõ, -^hzeɪ, -sə

3. AM 接辞

-nə, -caʔ

4. 述語動詞

-jĩ, -mĩ, -reʔ, -zẽ, -ɲõ, -ⁿdoʔ

TA 接辞を4種類に分けたのは、配列のみが問題になるのではなく、次のような異なりが認められることによる。

TA 接辞-1 は述語動詞が付加される場合が多く、かつ動詞句の接頭辞をその直前にとることができないものである。

TA 接辞-2 は述語動詞を必ずしも必要とせずかつ動詞句の接頭辞をその直前にとることができるものである。ここに含まれる接辞群は、1つの動詞句に並列して用いることができる。

AM 接辞は基本的に述語動詞をとらずかつ動詞句の接頭辞をその直前にとることができないものである。

述語動詞は、大半がそれ自体単独で用いられる場合(4.2.1 参照)と同一の形態である。

ただし動詞句は以上のいずれの接辞を伴わなくても文を終止することができる。

述語動詞・本動詞・形容詞に共通して付加できるものと、どれかに限定されるものに分かれる。また、述語動詞が本動詞の位置を占め、以上の接辞類をとる場合もあるが、あまり見かけない。

動詞句を否定する場合は否定辞(接頭辞)が本動詞につく場合と、動詞句末接辞に否定形を用いる場合がある。疑問文の場合は疑問接頭辞が TAM を表す接辞につくことがある。TAM 接辞にこれらの接頭辞を付加する場合は本動詞と異なる独立の声調範囲を形成する。述語動詞の否定形と同じ形式が単独で用いられる場合も同様である。

TA 接辞-1 の例

-zə (不確定未来)

(109) ʔtɕʰuʔ-φ ʔsʰu-tɕə ʔtə-zə
 2-[絶] 誰-[与] 尋ねる-[未]
 あなたは誰に尋ねるのでしょうか？

(110) ʔtjə-φ ʔla ʔjaʔ-zə-nō
 あれ-[絶] も よい-[未]-[判]
 (そうであれば) あれはよいと思います。

-tʂə (予定未来)

(111) ʔtɕʰuʔ-φ ʔtə rēj ʔgwə-tʂə-jī ʔtə ʔsʰō nə ʔgwə-tʂə-jī
 2-[絶] 今日 行く-[予未]-[判] または 明日 行く-[予未]-[判]
 あなたは今日行くつもりですか、それとも明日行くつもりですか？

-ʰdzə (状態、習慣)

(112) ʔŋa-φ ʔrō rō ʔa: ʔtjə fiō ʰda ʔkə zoʔ ʔjeʔ-ʰdzə-reʔ ʔsʰō-nə
 1-[絶] 自身で ああ あのように どう する-[状態]-[判] 思う-[現認]
 私自身「ああ、どうやったらあのようになるのか」と思います。

(113) ʔkʰwə-φ ʔmi: tʰē ʔkwo mī ʔjī-ʰdzə-reʔ
 3-[絶] いつも 過敏症のある [判]-[状態]-[判]
 彼はいつも過敏症のある状態です。

-tɕi (完了状態)

(114) ʔmbe duʔ ʰja-φ ʔʰtʂuʔ-tɕi-nə
 花瓶-[絶] 割れる-[完了状態]-[現認]
 花瓶は割れたままです。

TA 接辞-2 の例

-gɕ: (必要性を含意する未来)

(115) ʔŋa-φ ʔʂēj-nə ʔgwə-ʔnə-gɕ:
 1-[絶] 畑-[位] 行く-[否]-[必要]
 私は畑へ行かなくてもよいです。

-ʰde: (現在進行)

(116) ʔnə ʔkō-φ ʔtsʰə la ʔdō-ʰde:-nə
 人 群れ-[絶] 踊る-[進]-[現認]
 多くの人が踊っています。

-ɕʰoʔ (継続)

(117) ʔtə rēj ʔtʂʰi fia ʔna ʔde-φ ʔpəʔ-ɕʰoʔ
 今日 雨 大きな-[絶] 降る-[継続]
 今日大雨が降り続けています。

-tʰū (現在完了)

- (118) ʼŋa-φ ʼnde za ʼlwə ʼh[ʃu ʼŋə ʃʰu-φ ʼfi de: tʰũ
 1-[絶] ここ 年 10 20-[絶] 住む-[完]
 私はここに数十年住んでいました。

- (119) ʼtsʰaj-φ ʼʳjəʔ ʼfiō-tʰũ
 おかず-[絶] 冷える 来る-[完]
 おかずは冷たくなりました。

-tʰũに否定辞がつく場合、「まだ～していない」の意味になる。

- (120) ʼkʰwə-φ ʼtʷ: ʼhse: ʼma-tʰũ
 3-[絶] まだ 目を覚ます [否]-[完]
 彼はまだ目を覚ましていません。

-tʰi (達成)

- (121) ʼkʰwə-φ ʼʃũ pã ʼje: tʰi
 3-[絶] 仕事に行く-[達]
 彼は仕事に行きました。

-tsʰ₁ (完了)

- (122) ʼkʰwə-φ ʼfiō-ŋgwə-tʰ₁ ʼjĩ tə ʼŋa-φ ʼŋgwə ʼfiō-wa-sʰə
 3-[絶] [方]-行く-[完] のち 1-[絶] ちょうど 来る-[過]-[?]
 彼が出ていってから、私がちょうど来ました。

-wa (過去)

- (123) ʼtʰuʔ-φ ʼka: jə ʼŋu-wa
 2-[絶] どこで 買う-[過]
 あなたはどこで買いましたか？

-çõ (発話者にかかわる受益)

- (124) ʼŋa-φ ʼfiō-tə ʼhtçiʔ ʼhtse la ʼʃõ mwə ʼŋõ-çõ
 1-[絶] 来る-[名] 1 とても おいしい においがする-[受]
 私は(部屋に)入るなりとてもよい香りがしました。(いい気持ちです)

受益以外に、発話者による行為が近く完了した近過去の意味でも用いられる。

- (125) ʼŋa-φ ʼŋgwə je ʼhpeʔ-çõ
 1-[絶] さっき 着く-[近過去]
 私はさっき着きました。

-ŋõ (経験)

- (126) ʼtʰuʔ-φ ʼŋu: tə ʼjə je-φ ʼŋa-φ ʼkē ʼhta-ŋõ
 2-[絶] 買う-[名] 本-[絶] 1-[絶] すべて 見る-[経]
 あなたが買った本については、私はすべて読んだことがあります。

- (127) ʼŋa-φ ʼkʰwə-φ ʼntsʰa ʼŋgwə-ŋõ
 1-[絶] 3-[絶] 家-[絶] 行く-[経]
 私は彼の家に行ったことがあります。

-^hze: 23 (推測)

- (128) ʔ^hwə-φ ʔ^hgwə-ʔsə-ʔa-^hze: ɲō
 3-[絶] 行く-[未]-[疑]-[推]-[判]
 彼はたぶん行くでしょう。

-sə (伝聞)

- (129) ʔ^hwə-φ ʔ^ht^hō-ʔa-t^hū-sə ʔa jī
 3-[絶] 飲む-[疑]-[完]-[伝聞] [付加疑問]
 彼は飲み終えたのでしょうかねえ？

AM 接辞の例

-nə (現認)

- (130) ʔ^hwə-φ ʔ^hjaʔ-nə
 3-[絶] 滑って転ぶ-[現認]
 彼は滑って転びました。(その現場を目撃しました)

-caʔ (伝聞、非視覚確認)

- (131) ʔ^hwə-φ ʔlo sɿ-φ ʔā-^hze: caʔ
 3-[絶] 先生-[絶] [判]-[推]-[伝聞]
 彼は先生だそうです。
- (132) ʔndjə ʔsē-φ-tə ʔma-zō-caʔ
 この ごはん-[絶]-[主] [否]-おいしい-[非視覚確認]
 このごはんはおいしくありません。

述語動詞の例

-jī/-mī (判断)

- (133) ʔja-φ ʔnə-^hgwə ʔ^hsō-ʔmī
 1-[絶] [否]-行く 思う-[否/判]
 私は行かないと思っているのではありません。

-ʔā mboʔ (判断)

- (134) ʔ^hwə-φ ʔ^hε tsō ʔfō-ʔā mboʔ
 3-[絶] 昨日 来る-[判]
 彼は昨日来ました。

-ɲō (判断)

- (135) ʔ^hʃa-φ ʔpəʔ-ʔa-^hze: ɲō
 雨-[絶] 降る-[疑]-[推]-[判]
 雨が降っているでしょう。

-^hdaʔ (進行)

²³ この形式は単独で用いられることがほとんどなく、疑問接頭辞か述語動詞を伴う。

- (136) ʔtɕʰuʔ-φ ʔtɕʰə-φ ʔjeʔ-nɔʔ
 2-[絶] 何-[絶] する-[進]
 あなたは何をしているのですか？

以上のうち、いくつかの接辞は組み合わせて用いることができる。

- (137) ʔŋa-φ ʔtɕʰuʔ ʔni-tɕə ʔŋõ-tʰũ-wa-nə ʰsə jã-φ ʔtɕʰa
 1-[絶] 2.[能] 1-[与] 炒める-[完]-[過]-[名] 豆-[絶] 食べる
 私はあなたがわたしのために炒めてくれた豆を食べましょう。

4.5.2 疑問接尾辞・語気助辞

疑問接尾辞には /-ja/ と /-fiɛ:/ があ。主に動詞句に否定辞が含まれているような例、すなわち否定諾否疑問文を形成するときに用いられる。前者は常に独立の声調を担うが、後者は声調を担わない。いずれもやや反語的なニュアンスを帯びる。

- (138) ʔtɕʰuʔ-φ la ʔha ʔma-gwə-ʔja
 2-[絶] も [否]-知っている-[疑]
 あなたも知らないのですか？ (いや、知っているでしょう？)

- (139) ʔŋɛ: ʔtɕʰiʔ-tɕə ʔce:-jĩ-mě-fiɛ:
 1.[能] 2-[与] 言う-[判]-[否/判]-[疑]
 私はあなたに言っていませんでしたか？ (言った気がします)

語気助辞としてもっともよく観察されるのは /-fia/ である。疑問接尾辞と異なり、単独の声調を担うことはない。「念押し」の意味で用いられ、TAM は先行する接辞群によって決まると考えられる。

- (140) ʔŋa-φ ʔŋẽ ʔjoʔ-fia
 1-[絶] 先に 寝る-[気]
 私は先に寝ますね。

ほかにも、命令のときに用いられる /-ziʔ/ や「依頼」の意味で用いられる /-ruʔ/ も語気助辞に数えられる。

- (141) ʔtɕʰuʔ-φ ʔjə ʔə-φ ʔhta-ziʔ
 2-[絶] 本-[絶] 見る-[気]
 あなたは本を読みなさい。

- (142) ʔjə ʔə-φ ʔfiə tje ʔma-ʰzɑʔ-ruʔ
 本-[絶] あそこ [否]-置く-[気]
 本をあそこに置かないで下さい。

なお、 /-ziʔ/ と /-ruʔ/ が連続した /-ʔzi: ruʔ/ は「祈願」の語気助辞として用いられる。

- (143) ʔtɕʰuʔ-φ ʔjaʔ pwə-ʔzi: ruʔ
 2-[絶] よい-[気]
 お元気で。(あなたがよくありますように)

4.5.3 可能性・推測を表す表現

「たぶん～、おそらく～」などの可能性・推測をあらわす表現は非常に豊富にあり、全体像はまだつかめていない。基本的な構成法には、肯定の推測の場合「/ʔa-/ + 本動詞 + /-^hze:/ + 述語動詞」となるが、中には「本動詞 + 述語動詞 + /ʔa-^hze:/ + 述語動詞」となる事例もある。このときの述語動詞は判断動詞に限られ、また上述の判断動詞の用法とは異なって用いられる。否定の推測の場合「/ʔa-/ + 本動詞 + /-tʂ^hə/」となる。

- (144) ʔk^hwə-φ ʔjɯʔ-ʔä-ʔa-^hze:-reʔ
 3-[絶] [存]-[判]-[疑]-[推]-[判]
 彼はおそらく持っているでしょう。

- (145) ʔk^hwə-φ ʔa-^htʂ^ha-tʂ^hə
 3-[絶] [疑]-食べる-[否定推測]
 彼はおそらく食べていないでしょう。

4.6 動詞連続

動詞語幹は何の接続要素を伴うことなく並列することができる。継起する動作を表したり、移動動詞やその他「可能」「使役」などを表す動詞も動詞連続を形成できる。動詞連続を構成する第1の動詞語幹が1音節語で接頭辞・接尾辞ともに取らない場合、第1の動詞語幹と第2の動詞語幹で1つの声調範囲を形成する。

- (146) ʔtʂ^hɯʔ-φ ʔka zē ʔ^htʂ^ha-^hgwə
 2-[絶] いつ 食べる-行く
 あなたはいつ食べに行きますか？

- (147) ʔŋa-φ ʔj^hkeʔ-φ ʔzō-^hdō-nə
 1-[絶] 英語-[絶] 学ぶ-愛する-[現認]
 私は英語を学ぶのが好きです。

- (148) ʔŋa-φ ʔtə^htʂiʔ ʔ[ɛ-^htʂoʔ-ruʔ
 1-[絶] ちょっと 考える-させる-[気]
 私に考えさせてください。

4.7 呼応する動詞句表現

Choswateng 方言には2句以上の動詞句を結ぶ固定された表現があり、そこに現れる現象には以上の記述に現れなかったものも含まれる。

[部分重複]-jō + 動詞/形容詞 + [部分重複]-jō + 動詞/形容詞 「～も～も」

- (149) ʔk^ho^hdzi ʔpu^hsa:-φ-tə ʔkō-jō ʔkō rī ʔ^hdzaʔ-jō ʔ^hdzaʔ pa
 3.[属] 息子-[絶]-[主] [重]-も 高い [重]-も 太い
 彼の家の息子は背も高くよく太っています。

ʔt^ho: rə + 形容詞 + ʔt^ho: rə + 形容詞 「時に～時に～」

- (150) ʔʰo: rə ʔʰa: ʔʰo: rə ʔcō
 時に 暑い 時に 寒い
 時には暑く、時には寒いです。

ʔjō+動詞句+ʔjō+動詞句「～したり～したりする」

- (151) ʔjō ʔʰtʂʰa ʔjō ʔma-ʔʰtʂʰa
 たり 食べる たり [否]-食べる
 食べたり食べなかつたりします。

ʔmē na tə+動詞句+ʔmē na tə+動詞句「～するか～するかである」

- (152) ʔndjə ʔjə ʔə-φ ʔmē na tə ʔpə-ʰtsō ʔmē na tə ʔnə kə-tə ʔpə-ʰtje?
 この 本-[絶] するか [方]-売る するか 他人-[与] [方]-与える
 この本は、売ってしまうか、ほかの人にあげなさい。

ʔpu +形容詞+ʔpu +形容詞「より～ならより～」/ʔpu-peʔ ʔpu²⁴ +動詞句「どんどん～」

- (153) ʔtəʰuʔ-φ ʔpu-peʔ ʔpu ʔma-φ ʔda-ŋō
 2-[絶] どんどん 母-[絶] 似ている-[判]
 あなたはどんどん母親に似てきています。

5 文のタイプと分類

5.1 文の成立

Choswateng 方言における発話は、間投詞のようなものを除いたとしても、名詞か動詞のどちらか一方で成立する 1 語文がある。

- (154) ʔpʰaʔ-φ
 ぶた-[絶]
 ぶた (だ) !

- (155) ʔgwə
 行く
 行こう。

(154) は、発話者が家畜小屋に何がいるのか見たのちの発話として成立する。(155) は頻繁に認められる発話である。

また、名詞句からなる 1 語文を除けば、動詞句を伴わない名詞文はほとんど用いられない。ただし、定義的な意味をもつ発話は、述語動詞を省略する表現が認められる。ただし頻繁には現れない。

- (156) ʔtə rēj-φ ʔkʰe tsō-jə ʔshō nə-φ
 今日-[絶] 昨日-[属] 明日-[絶]
 今日は昨日の明日 (です)。

²⁴ 形態素 ʔpu 自体の意味は不明であるが、-peʔ は比較格標識である。

また、間投詞を除いて名詞句からも動詞句からも漏れる語が認められる。次のような例は副詞と呼ぶことができる：/la/²⁵「～も（また）」、/rõ rõi/「～自身（で）」、/kē kē/「みんな（で）」、/ʰtse la/「とても」など。副詞は基本的に修飾する動詞句の直前に置かれる。ただし/la/は名詞句に後続する形で用いられる。

(157) ʰkʰwə-φ-tə rõi rõi ʼja: ʰtse la -ʰsõ
 3-[絶]-[主] 自身 上の とても 思う
 彼は自分自身誇らしいととても思っています。

(158) ʰkʰwə-φ ʷgwə-εə: ʼna ʼŋa-φ ʰla ʷgwə
 3-[絶] 行く-言う ならば 1-[絶] も 行く
 彼が行くと言うなら、私も行きましょう。

接続詞については 5.4 を参照。

5.2 文のタイプ

Choswateng 方言においては、平叙文と疑問文が形態統語的に明確に区別される。命令文は命令の対象（通常は2人称）が伴わず発話として成立している場合をいうが、実際にはほとんどの場合で2人称代名詞が文中に現れることが可能で、このとき記述の上では平叙文と変わらず、発話時の語気などによって機能が変わってくるといえる。また、文のタイプとしては勸奨文や祈願文が言及されうるが、Choswateng 方言では命令文もしくは平叙文と形式上変わることがない。

以下、平叙文、疑問文、命令文について記述する。

5.2.1 平叙文

(159) ʰkʰwə-φ ʼpi:φ ʷjuʔ-reʔ
 3-[絶] 子牛-[絶] [存]-[判]
 彼は子牛を持っています。

(160) ʰkʰwə-φ ʼma-ᵐtʰõ-tʰi
 3-[絶] [否]-飲む-[達]
 彼は飲みませんでした。

次の文は意味的には禁止命令を表しているが、文のタイプとしては平叙文と変わらない。

(161) ʰtɕʰʷ-φ ʼjə ʷə-φ ʼma-çi:
 2-[絶] 文字-[絶] [否]-書く
 あなたは字を書いてはいけません。

次の文は意味的に祈願を表しているが、文のタイプとしては平叙文と変わらない。

²⁵ 声調は不定である。

- (162) `tɕ^huʔ-φ ʰi de mwə-ʔzi: ruʔ
 2-[絶] 元気だ-[気]
 お元気で。(あなたが元気でありますように)

5.2.2 疑問文

疑問文には諾否疑問文、疑問詞疑問文、付加疑問文、選択疑問文などの種類がある。

諾否疑問文は疑問接辞を動詞句に付加して表す。4.1 で述べたように、疑問接頭辞は動詞/形容詞語幹の直前に付加されるか、TAM 接辞群の中の TA 接辞-2 および述語動詞の直前に付加される。疑問接尾辞の場合は動詞句末に付加される。

- (163) `tɕ^huʔ-φ ʔa-n^hõ-çõ
 2-[絶] [疑]-見える-[受]
 あなたには見えませんか？
- (164) `tɕ^huʔ-φ ʔa-jaʔ-nə
 2-[絶] [疑]-よい-[現認]
 あなたは元気ですか？
- (165) `tɕ^huʔ-φ `tɕ^heʔ-ʔa-t^hũ-çõ
 2-[絶] 疲れる-[疑]-[完]-[受]
 あなたは疲れませんか？
- (166) ʔk^hwə-φ ʔla s^ha ʔgwə-ʔa-reʔ
 3-[絶] [地名] 行く-[疑]-[判]
 彼はラサに行きましたか？
- (167) `tɕ^huʔ-φ ʔma-ʰgũ-ʔja
 2-[絶] [否]-必要である-[疑]
 あなたはいらないのですか？
- (168) ʔk^hwə-φ ʔçwo sē-φ ʔmē-ʔa-reʔ
 3-[絶] 学生-[絶] [否/判]-[疑]-[判]
 彼は学生でないのですか？
- (169) ʔk^hwə-φ ʔn^hõ-ʔma-n^hdoʔ-fiɛ:
 3-[絶] 飲む-[否]-[進]-[疑]
 彼は飲んでいなかったのですか？

付加疑問文は原則文末に「/ʔa/+判断動詞」を配するが、声調が異なるものに、/ʔa reʔ/がある²⁶。これらの要素が付加疑問文を形成する要素として現れる場合、語源のように形態素分析を行わない。

²⁶ この要素は ʔa-reʔ ([疑]-[判]) に由来するものである。ただし声調のパターンが異なる。この慣用用法といえるだろう。

- (170) ʔoⁿdzɔ ʔje:ʰiɡu: ʔa reʔ
 このように する-[必要] [付加疑問]
 このようにするべきですよ？

- (171) ʔtɕʰuʔ-φ ʰpɛ-φ ʔka:ʰdoʔ ʔa jī
 2-[絶] 兄弟-[絶] [否]-[存] [付加疑問]
 あなたには兄弟がいないのですよ？

選択疑問文の場合、選択する要素の間にʔa reʔ を配する²⁷か、または接続詞ʔə 「または」を用いる。

- (172) ʔtɕʰuʔ-φ ʰmi ɕjɛ-φ ʰiʔsʰa-zə ʔa reʔ ʔə sɿ-φ
 2-[絶] ビーフン-[絶] 食べる-[未] [選択疑問] もち米麵-[絶]
 ʰiʔsʰa-zə
 食べる-[未]
 あなたはビーフンを食べますか、それとももち米麵を食べますか？

- (173) ʰndjə ʔjə ʔə-φ-tə ʔtɕʰiʔ-tə-φ ʔa-reʔ ʔə ʔtɕʰiʔ-tə-φ
 この 本-[絶]-[主] 2.[属]-[名]-[絶] [疑]-[判] または 3.[属]-[名]-[絶]
 ʔa-reʔ
 [疑]-[判]
 この本はあなたのですか、それとも彼ののですか？

5.2.3 命令文

- (174) ʔlɔ-zɿʔ
 起きる-[気]
 起き上がりなさい。

- (175) ʔma-ɕa
 [否]-動く
 動くな！

次のように、勧誘も命令文と構造的に同じになる。

- (176) ʔgwə
 行く
 行きましょう。

5.3 文の埋め込み

平叙文の埋め込みでは、補文標識を伴わない。

²⁷ これも付加疑問の事例と同じく、ʔa-reʔ ([疑]-[判]) に由来するといえ、また声調パターンも異なっ
 て現れる。同様に、語源のように形態素分析を行わない。

- (177) ʼŋa-φ ʼtʂʰa-ʼma-nō ʼjō ʼmī
1-[絶] 食べる-[否]-[経] も [判/否]
私は食べたことがないわけでもありません。
- (178) ʼkʰwə-φ ʼŋgwə ʼcə: ʼna ʼŋa-φ ʼla ʼŋgwə
3-[絶] 行く 言う ならば 1-[絶] も 行く
彼が行くというのなら、私も行きます。
- 諾否疑問文の埋め込みでは、埋め込まれた文に補文標識/-tci/を伴うことが多い。
- (179) ʼkʰo ʰdzɪ ʼma-φ ʼkʰwə-φ ʼje ʰə-φ ʼʔa-ʰdēj-tci ʰsō-tsə
3.[属] 母-[絶] 3-[絶] 本-[絶] [疑]-読む-[補] 思う-[気]
彼の母は彼が勉強するかどうか心配しています。
- 疑問詞疑問文の埋め込みでは、補文標識を伴わない。
- (180) ʼtʂʰuʔ-φ ʼʔa ni-φ ʼmbejʔ ʼtʂʰə-φ ʼjeʔ-ʰdzə ʼsɪ:
2.[能] おば 呼ぶ 何-[絶] する-[状態] 言う
あなたはおばさんと呼んで何をするように言うのですか？
- (181) ʼŋa-φ ʼrō rō ʼʔa: ʼtjə ʰiō ʰda ʼkə zoʔ ʼjeʔ-ʰdzə-reʔ ʰsō-nə
1-[絶] 自身で ああ どのように どう する-[状態]-[判] 思う-[現認]
私自身「ああ、どうやったらあのようなになるのか」と思います。

5.4 複文

等位関係を表す並列文は通常接続詞を必要とせず、第1文にはTAMを表す接辞類がつかないことが多い。

- (182) ʼtʂʰuʔ-φ ʼtow fu-φ ʼnɜ: ʼŋa-φ ʼsʰa-φ ʼnɜ:-fia
2-[絶] 豆腐-[絶] 買う 1-[絶] 肉-[絶] 買う-[気]
あなたは豆腐を買って、私は肉を買いますね。
- (183) ʼkʰwə-φ ʼʰdza ʰkeʔ-φ-la ʼtʂʰi: ʼjī ʰkeʔ-φ-la ʼtʂʰi:-reʔ
3-[絶] 漢語-[絶]-も 知っている 英語-[絶]-も 知っている-[判]
彼は漢語も知っているし、英語も知っています。

条件や時間的順序に従って継起する事象を時間を表す要素を用いず表す場合、接続詞ʼnaが用いられる。

- (184) ʼtje-φ ʼtʂʰō-φ ʼhta ʼna ʼnə-φ ʼʰdeʔ-nō
あの 家-[絶] 見る と 人-[絶] いる-[判]
あの家を見ると、人がいます（いるのが目視で確認できます）。
- (185) ʼŋa-φ ʼtʂʰu tsʰəʔ ʼʰdzeʔ ʼfio la ʼtsə-ʼma-ʰiō ʼna ʼtʂʰuʔ-φ
1-[絶] 時間 8 まだ [方]-[否]-来る ならば 2-[絶]
ʼrō rō ʼsʰō
自分で 去る.[命]
私が8時にまだこちらに来なかったら、あなたは自分で帰りなさい。

譲歩を表す場合にも接続詞`na が用いられる。

- (186) ʼŋa-φ ʼŋi[ʂʰa-tʰŋ]-ʼma-tʰũ ʼna ʼŋi[ʂʰa-gu:
 1-[絶] 食べる-[完]-[否]-[完] ても 食べる-[必要]
 私は食べ終わることがなくても、食べたいです。

nə tə²⁸ 「～のあと、～なので」

- (187) ʼŋi[ʂʰa-tʰũ ʼŋi[ʂʰa-tʰũ nə tə ʼtsʰə ja-φ ʰtsō-nə-φ
 食べる-[完] 飲む-[完] あと 野菜-[絶] 売る-[名]-[絶]
 ʼrə-ŋgwə-tʰũ
 [方]-行く-[完]
 食べて飲んだあと、野菜を売る人は帰っていきました。

- (188) ʼtʰu? ŋa: nəj ka-φ ʼŋjē ʰtʰei? ŋa ʰha ʰkwə-zē nə tə ʼŋa-φ ʼtē
 2.[双]-[絶] 以前から 知っている-[判] なので 1-[絶] また
 ʰʕe: ʰnə-ʰtʰe?
 [否]-紹介する
 あなたたち2人は以前から知り合いだったので、私が再び紹介はしません。

ʼrēj 「～しているときに」

- (189) ʼsē-φ ʼŋi[ʂʰa ʼrēj ʼjə jə-φ ʼma-ŋdzə?
 ごはん-[絶] 食べる とき 本-[絶] [否]-見る
 ごはんを食べているときに本を読むな。

ʼti: 「～のあとで²⁹」

- (190) ʼŋa-φ ʼŋjē ʼŋgwə ʼti: ʼtʰu? ʼtʰu?
 1-[絶] 先に 行く するので 2-[絶] 来る.[命]
 私は先にいきますから、そののちあなたはあとで来なさい。

ʼma zə tə 「～しないだけでなく」

- (191) ʰʕwa-φ-tə ʼʔa lju-φ ʰca? ʼma zə tə ʰmʰu? ŋa-wə
 ねずみ-[絶]-[主] 猫-[絶] 恐れる しないだけでなく 追い払う-[?]
 ねずみが猫を恐れない上、(ねずみが猫を) 追い払います。

ʰtʰa hē³⁰ 「～のために」

- (192) ʰkwə-φ ʼpe?-φ ʼzē ʰtʰa hē ʰpe? ʰke?-φ ʰʕe?-ʕhi:-nə
 3-[絶] チベット人-[絶] [判] のために チベット語-[絶] 話す-できる-[現認]
 あなたはチベット人なので、チベット語を話すことができます。

²⁸ この形式は声調を担わない。形態的に見ると、2種類の名詞化接辞が連続しているようであるが、このような分析は困難であろう。同様に、第1音節がAM接辞、第2音節が名詞化接辞という分析も、(188)のように述語動詞にAM接辞がつく事例があるため、困難であろう。ゆえに、声調を担わない理由は現段階では不明である。

²⁹ これは副詞として「後ほど」の意味で単独で用いられることもある。

³⁰ 第2音節は具格標識/hē/と関連すると考えられる。

略号表

文法機能語で略号を作らないものは直接 [] の中に機能を書き込んでいる。複数の略号が重なるときは / で区切って示す。語形変化で何らかの文法的機能を表す場合は、語義のあとに . をはさんで機能を書き入れる。

[絶]	絶対格	[否]	否定辞
[能]	能格	[方]	方向接辞
[与]	与格	[疑]	疑問接辞
[属]	属格	[未]	不確定未来
[位]	位格	[予未]	予定未来
[具]	具格	[進]	進行
[奪]	奪格	[過]	過去
[比]	比較格	[完]	現在完了
[名]	名詞化標識	[達]	達成
[複]	複数	[経]	経験
[双]	双数	[受]	受益
[量]	量詞	[推]	推測
[判]	判断動詞	[気]	語気助辞
[存]	存在動詞	[補]	補文標識
[重]	重複	[主]	主題標識
[命]	命令形		

参考文献

- 澤田英夫 (編) (2013) 『チベット＝ビルマ系言語の文法現象 2 : 述語と発話行為のタイプからみた文の下位分類』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 鈴木博之 (2005) 「チベット語音節構造の研究」 『アジア・アフリカ言語文化研究』 第 69 号 1-23
- (2011) 「カムチベット語嘎嘎塘・勺洛 [Zhollam] 方言の文法スケッチ」 大西正幸・稲垣和也編 『地球研言語記述論集』 3, 1-35
- (2012) 「カムチベット語燕門・斯嘎 [Sakar] 方言の文法スケッチ」 稲垣和也編 『地球研言語記述論集』 4 (大西正幸博士還暦記念号), 123-158
- (2014) 「カムチベット語香格里拉県小中甸郷吹亞頂 [Choswateng] 方言の音声分析と語彙 : rGyalthang 下位方言群における方言差異に関する考察を添えて」 『国立民族学博物館研究報告』
- Hongladarom, Krisadawan (1996) Rgyalthang Tibetan of Yunnan: a Preliminary Report. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* Vol. 19.2/Fall, 69-92
- (2000) Rgyalthang Tibetan lexicon and an appraisal of a Southeast Asian wordlist. *Mon-Khmer Studies* 30, 83-94

- (2007a) Grammatical peculiarities of two dialects of Southern Kham Tibetan. In : Roland Bielmeier & Felix Haller (eds.) *Linguistics of the Himalayas and Beyond*, 119–152, Mouton de Gruyter
- (2007b) Evidentiality in Rgyalhang Tibetan. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* Vol. 30.2, 17–44
- Suzuki, Hiroyuki (2013) *Overview of the dialects spoken in rGyalhang from the historical perspective*. Paper presented at 13th Seminar of the International Association for Tibetan Studies (Ulaanbaatar)
- Tshe-ring Lha-mo (2013) *Khams sDe-dge-skad-kyi brda-sprod*. 民族出版社
- Wang, Xiaosong (1996) Prolegomenon to Rgyalhang Tibetan phonology. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* Vol.19.2/Fall, 55–67
- 陸紹尊 (1990) 〈藏語中甸話的語音特點〉《語言研究》第2期 147–159
- (1992) 〈雲南藏語語音和語匯簡介〉《藏學研究論叢》第4輯 120–131 西藏人民出版社
- 瞿靄堂・金效靜 (1981) 〈藏語方言的研究方法〉《西南民族學院學報》第3期 76–84
- 王曉松 (2008) 〈對中甸藏語方言的粗淺認識——從語音上看中甸方言的特點和規律〉《王曉松藏學文集》368-378 雲南民族出版社
- 吳光范 (2009) 《迪慶・香格里拉旅遊風物誌—沿著地名的線索》雲南人民出版社
- 《雲南省誌》編纂委員會 (1998) 《雲南省誌 卷五十九 少數民族語言文字誌》雲南民族出版社
- 雲南省中甸縣地方誌編纂委員會編 (1997) 《中甸縣誌》雲南民族出版社
- 張濟川 (1993) 〈藏語方言分類管見〉戴慶廈等編《民族語文論文集—慶祝馬學良先生八十壽辰文集》297-309 中央民族學院出版社
- 趙金燦・李玉朋 (2014) 〈建塘藏語聲調實驗〉《四川民族學院學報》第1期 64–68
- 朱曉農 (2010) 《語音學》商務印書館

[付記]

筆者による Choswateng 方言の言語資料収集に関する現地調査については、以下の援助を受けている。

- 平成 23 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (A) 「ギャロン系諸言語の緊急国際共同調査研究」(研究代表者：長野泰彦、課題番号 21251007)
- 平成 25 年度日本学術振興会科学研究費補助金若手研究 (B) 「言語多様性の記述を通して見る中国雲南省チベット語の方言形成の研究」(研究代表者：鈴木博之、課題番号 25770167)

目次				
1	はじめに	1	4	動詞句
2	Choswateng 方言の音体系	2	4.1	動詞句の基本構造 19
2.1	音節構造	2	4.2	動詞の種類 19
2.2	超分節音素	3	4.2.1	述語動詞 19
2.3	母音	3	4.2.2	本動詞 22
2.4	子音	4	4.3	形容詞：述語用法として . . . 22
3	名詞句	4	4.4	接頭辞類 23
3.1	名詞句の基本構造	4	4.4.1	方向接辞 23
3.2	名詞	5	4.4.2	否定辞 24
3.3	代名詞	5	4.4.3	疑問接辞 25
3.3.1	人称代名詞	5	4.5	接尾辞類 25
3.3.2	指示代名詞	6	4.5.1	TAM を表す接辞群 25
3.3.3	疑問詞類 (形容詞・副詞も含む)	7	4.5.2	疑問接尾辞・語気助辞 . . . 30
3.4	名詞化標識	9	4.5.3	可能性・推測を表す表現 . . 31
3.5	格体系	10	4.6	動詞連続 31
3.5.1	格標識一覧表	10	4.7	呼応する動詞句表現 31
3.5.2	用法	11	5	文のタイプと分類
3.6	数詞・量詞	16	5.1	文の成立 32
3.6.1	基数詞	16	5.2	文のタイプ 33
3.6.2	序数詞	17	5.2.1	平叙文 33
3.6.3	量詞	17	5.2.2	疑問文 34
3.7	形容詞：修飾用法として . . .	18	5.2.3	命令文 35
3.8	主題標識	18	5.3	文の埋め込み 35
			5.4	複文 36
			略号表	38
			参考文献	38